【書　評】
大矢悠三子著

『江ノ電沿線の近現代史』

クロスカルチャー出版　2018年10月刊
Ａ５判　177頁　1,800円＋税

鉄道各社ないし路線と沿線地域との関係およびそのプロセスを考察する『〇〇沿線の近現代史』が発刊されはじめて数年が経過し，少なくとも鉄道史にかかわる関係者あるいは鉄道史に興味を持つ読書家の間では馴染みのシリーズになりつつある。平成28年の初刊行が小田急電鉄，翌29年が京王電鉄と大手私鉄が取り上げられた。これらに対して，本書は，藤沢・鎌倉間10kmを34分で結び，その間に15駅・１信号所を有する中小私鉄の江ノ島電鉄がテーマである。経営は小規模ながらも，開業以来110余年の歴史を有し「江ノ電」として親しまれているユニークな同社およびバラエティーに富んだ沿線各地の移り変わりが一書にまとめられたことは，鉄道史および地域史研究において意義深い。

筆者の大矢氏は，長らく藤沢市史の調査・執筆に力を注ぎ，これをベースとした学術論文を発表するとともに，茅ヶ崎市史の研究にも関わるなど，江ノ島電鉄沿線はもとより湘南地域全体の近現代史に通暁している。蓋し，本テーマの担い手ないし語り手としてはベストであったといえる。

本書の構成は，次のとおりである。

第一章　江ノ電の開業――湘南トライアングルの形成――
第二章　湘南の大都市・藤沢
第三章　憧憬の鵠沼――開発分譲型別荘地の嚆矢――
第四章　大東京の風景地と湘南海岸
第五章　湘南のランドマーク――不思議アイランド・江の島――
第六章　海岸線―「江ノ電のある風景」の変貌
第七章　鄙の地，聖地となる
第八章　鎌倉を愛した文人たち
第九章　由比ヶ浜に海浜院ありき
第一〇章　古都・鎌倉に遊ぶ，暮らす
あとがき
関連年表・参考文献

以下，各章の内容について，評者の関心にそくしつつ紹介およびコメントしていくこととする。

第一章では，明治33年の江之島電気鉄道としての創立，35年の藤沢・片瀬（現・江ノ島）間の開通，36年から40年にかけての片瀬から鎌倉・大町までの延伸，43年の小町（後に鎌倉と改称，現在は廃止）まで全通，44年の横浜電気さらに大正10年の東京電灯への合併，同年の東海電気土地の発起と15年の江ノ島電気鉄道の設立（現在の江ノ島電鉄の起源）に至るまでの過程がコンパクトにまとめられている。経営主体の変容はよく理解できたものの，その中心となったとみられる江之島電気鉄道発起人の福井直吉や山本庄太郎，初代社長の青木正太郎，加えて明治39年に社長となった雨宮敬次郎らの活動に関しても知りたかったところである。

第二章では藤沢が取り上げられている。明治20年の東海道線，前述の江之島電気鉄道の藤沢駅の開設に加えて，昭和４年の小田原急行鉄道（現・小田急電鉄）江ノ島線の開通と藤沢駅の開業により「人を集める駅」（22頁）としての機能が拡大していった。戦後の昭和32年に藤沢市が策定した「藤沢綜合都市計画」とこれに伴う土地区画整理および市街地再開発事業は藤沢駅周辺の様相を大きく変化させた。当時の江ノ島鎌倉観光（昭和24年に江ノ島電気鉄道から改称）は駅舎等の移転を余儀なくされたものの，これを契機として，49年に江ノ電第１・２ビルを竣工して，江ノ電百貨店を開業し藤沢駅を新設した。同社の経営において画期となったのである。

第三章は鵠沼に関してである。それまでは鄙びた半農半漁の地であったが，明治19年に伊東将行および三觜直吉や三留栄三らにより海水浴場が開かれ，風光明媚さと東海道線や江之島電気鉄道の開通に伴う利便性の向上により，別荘地としての開発が進んだ。伊東が開業した東家旅館は文学者の交流の場となった。現在の鵠沼は藤沢市を代表する住宅地であるが，別荘地からの住宅地への変遷も取り上げる必要があったと思われる。

第四章は湘南海岸公園についてである。同公園は神奈川県により広域公園として昭和32年に開設された。一帯の海浜公園化に関しては，実現しなかったものの昭和５年に当時の神奈川県知事の山県治郎が風致地区を活用し美観地区として開発する構想を打ち出し，内務省による「大東京の風景地」構想とも合致していたこと，同公園の施設整備にあたって江ノ島鎌倉観光（江ノ島オートパーク）や小田急電鉄，東京急行電鉄・東急観光などが競争を繰り広げたこと，藤沢市が「東洋のマイアミ（ビーチ）」と称したことは興味深い史実である。

第五章は江の島の変遷が詳述されている。江の島（江島神社）は，鎌倉時代以降に戦いの神，江戸時代に芸能・音楽・知恵の神や福徳財宝の神あるいは大山詣の精神落としの地，明治時代後期に再び戦勝祈願の地と変貌していった。さらに，江ノ島電気鉄道や小田原急行鉄道江ノ島線および湘南電気鉄道などの交通アクセスの向上により，関東を代表する参詣地・行楽地と進化した。昭和30年代初頭のいわゆる太陽族ブームを経て，39年の東京オリンピックのヨット競技会場となったことで全国にその名が広がった。これらに加えて，江ノ島鎌倉観光による事業展開（江ノ島園・展望台・エスカーなど）も言及すべきであった。

第六章では腰越から稲村ヶ崎にかけての海岸線一帯が取り上げられている。腰越の漁港，神奈川県立鎌倉高等学校，集結するサーファー，七里ヶ浜の住宅地の成り立ちや存在は特徴的であり，江ノ電とともに地域の光景ないし風景を形づくっている重要な要素といえる。

第七章は極楽寺についてである。正元元年（1259）に霊鷲山感応院極楽律寺として創建されたと伝えられる同寺の移り変わりを丁寧に振り返り，その背景を検討している。

同寺や江ノ電が耳目を集めたのは，昭和51年から１年間日本テレビ系列で放映された中村雅俊主演のドラマ「俺たちの朝」がきっかけであった。筆者が「俺たちの朝族」と称するファンが放送時から多数詰めかけた。これに対し江ノ島鎌倉観光は積極的に協力している。

筆者は，極楽寺駅が「江ノ電を映像文化のなかで類まれな存在感をもつ鉄道へと発進させ」，また「沿線を単なるロケ地ではなく，物語の舞台としてクリエーターにひらめきや想像力をかきたてる地として世に知らしめる契機となった」（107頁）と述べているが，まさに正鵠を得た指摘である。

第八章は鎌倉に縁がある文学者，いわゆる「鎌倉文士」に関してである。久米正雄や大佛次郎らによる鎌倉ペンクラブの結成をはじめ，鎌倉カーニバルの開催，鎌倉文庫の開店，戦後の鎌倉アカデミアの開学，乱開発に反対する鎌倉の自然を守る会の立ち上げ，文学館開設に向けての支援・協力など，文学者たちの地域での多様な活動は注目すべき事績といえる。

第九章は由比ヶ浜を取り上げている。由比ヶ浜は稲村ヶ崎から材木座にかけての海岸の総称という。一帯は海水浴場として著名であるが，筆者は明治以降の海水浴の動向を考察している。宣教師で医師のＪ・ヘボンと海水浴，内務省衛生局や医学者による伝染病（特にコレラ）対策としての海水浴の奨励と海水浴場開設への支援，鉄道開業と海水浴場の広がり，日本の上流階級への避暑のスタイルとしての認識と一般市民における憧れの対象化といった重要なポイントが示された。

続いて，明治20年に創設された鎌倉海浜院について詳説している。同院は重病者の回復や健康増進さらに慢性病や結核などの保養を目的としたサナトリウムであり，内務省衛生局初代局長の長与専斎が海水浴場の開設とともに支援した。翌21年にホテルへの転換を余儀なくされたものの，地域のあゆみにおいて特筆に値する。

第一〇章は鎌倉の変遷を立ち入って検討している。鎌倉は江戸後期には浄泉寺（高徳院）の大仏の蓮華座の造営がままならないほど寂れていたが，幕末の開港以降は横浜に居留した多くの外国人が訪れるようになり，再び注目を集めた。東海道線や明治22年の横須賀線の開業，江之島電気鉄道の延伸により周辺行楽地との回遊性が高まっていった。

時代は飛んで，平成における鎌倉市の観光客数は，10年前後に減少が見られたものの，ほぼ順調に増加した。寺社仏閣や海水浴場など多数の拠点を有するとともに首都圏から日帰り可能である鎌倉は観光地としての優位性が顕著となり，外国人観光客も増大している。